

特別講演 2

「日常診療における腎疾患 ～最近の治療の進歩をめぐる～」

新潟大学医学部第二内科 教授

下条 文武 先生

ライフスタイルの変化、高齢化に伴って慢性腎臓病（CKD：Chronic Kidney Disease：血清クレアチニン値から換算した推定 GFR が 60ml/mim 以下）を有する患者数は、我々が予想するよりはるかに多い。そして、CKD 患者においては心血管事故のイベント発生が有意に高く、生命予後にも悪影響を与える重要なリスクとなることが明らかにされた。CKD の原疾患は多彩であるが、糖尿病性腎症はその増加が著しく注目される。原発性腎疾患のなかでは、やはり IgA 腎症は重要な疾患である。私共の教室の腎生検数は 13,000 件を数えるが、それらの症例のなかで、例えば IgA 腎症に対する扁桃摘出術の治療効果の有用性は、教室の 10 年以上の経過を解析して証明し得たものである（Kidney Int65：1135,2004）。現在、私共は、遺伝子多型、DNA チップ、およびプロテオミクス解析の腎臨床への応用を試みている。また、新たな非侵襲的診断法、特に尿中細胞分析と尿蛋白プロテオミクス解析の両者を組み合わせることにより、精度の高い病態診断が可能である。

現在、慢性腎炎の治療については、ACE 阻害薬、アンジオテンシン受容体拮抗薬などの RAS ブロッカーを、これまでのステロイド治療に加味する、あるいは、ステロイドに替わって、単独あるいは併用する方針が基本といえる。しかし、RAS ブロッカーは、その有効性に個体差があることから、この個体差に関して、腎生検組織解析に基づく、テーラーメイド医療が腎炎治療の方向であろうと考える。本講演では、日常診療における腎疾患の重要性と治療の進歩について焦点を絞って紹介し、併せて私どもが取り組んでいる課題についても言及する。